

Ⅱ 花き市場の現状

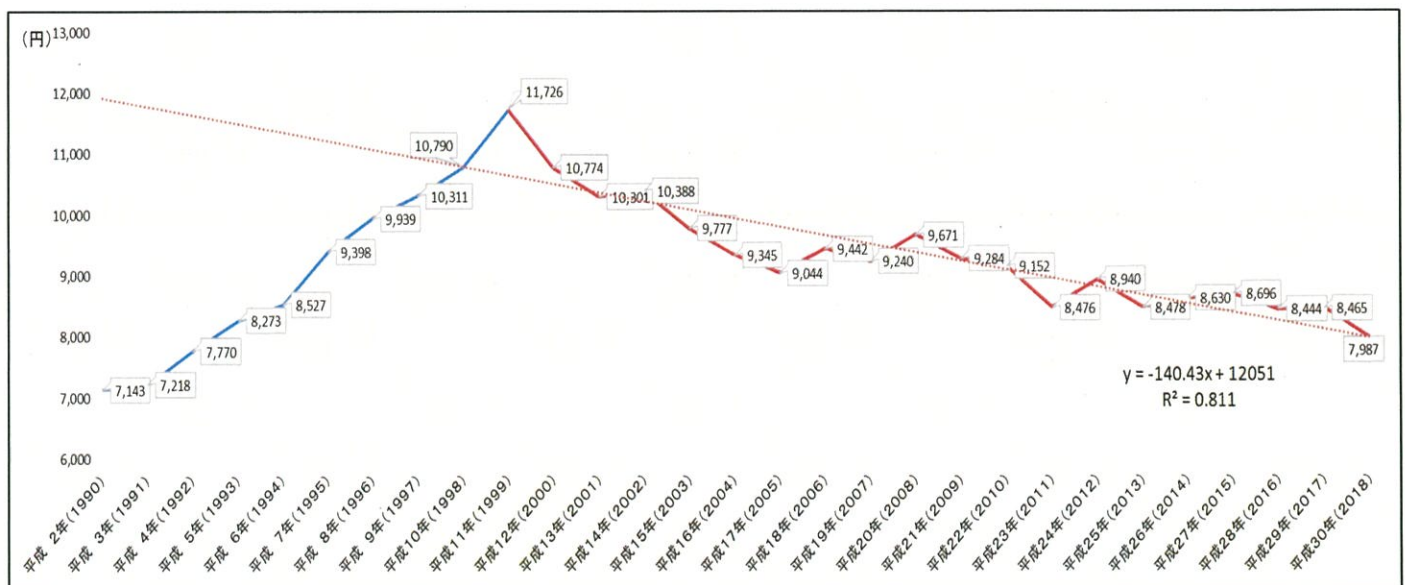
1. 需要の状況

まず花きの需要の状況を確認する。一世帯あたりの鉢物の年間支出金額について考察する。後述するように、本実証実験では、鉢物を対象に行ったため、鉢物の状況について確認する。総務省の統計によれば、一世帯あたりの園芸品・同用品の支出額という項目が鉢物・苗物の支出額に相当するため、この金額推移を傾向判断材料として考察する。

図1を見ると、1999年には11,726円だったものが2018年には7,987円と、約68%になっている。世帯当たりの可処分所得の減少から各品目への消費支出が減少していることから、花きの消費もそのような全体的な動きと連動した面が否めない。また、母の日や年末といったギフト需要期における花の利用が減少したこと、家庭内において花の置き場、飾り場として確保していたはずのベランダや庭先等が集合住宅の増加で減少したことなど、消費者のライフスタイルの変化等も影響している。

1999年から2018年までの傾向をもとに今後を予測すると下記ようになる。予測にあたっては、回帰分析（最小自乗法）の線形近似を行った。今後も緩やかに減少していくものと想定される。

図1 一世帯あたりの園芸品・同用品の年間支出金額の推移（円）



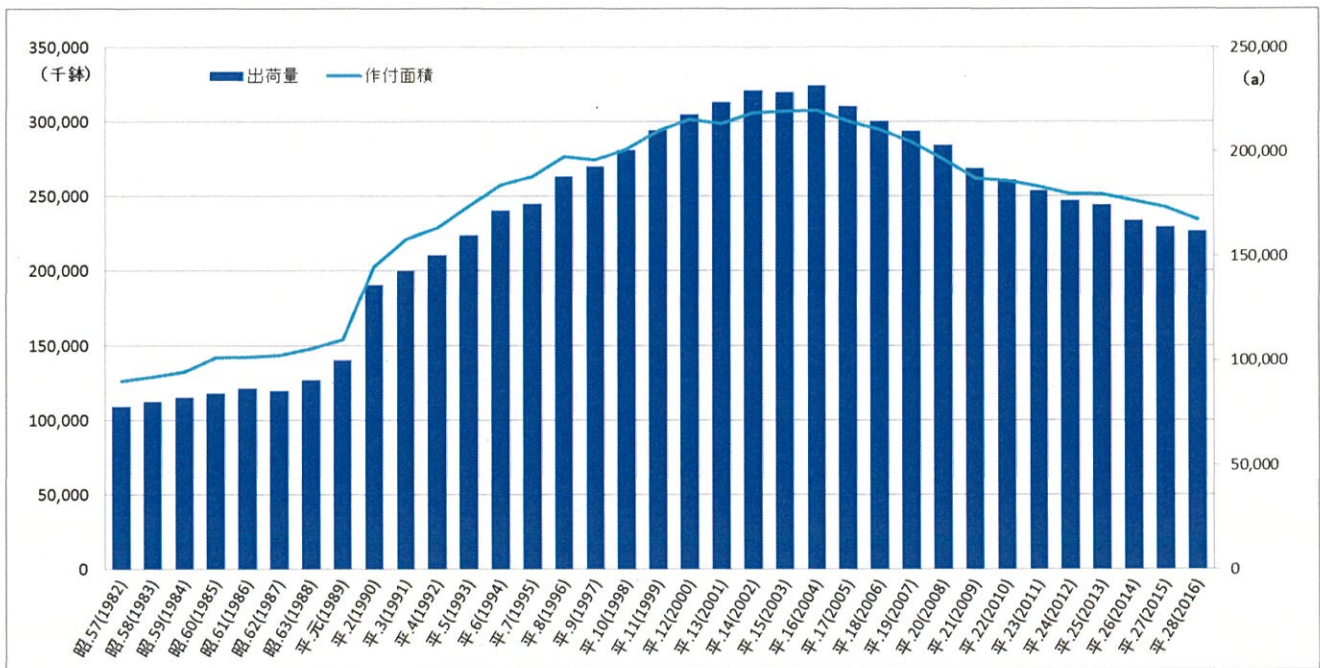
(資料) 総務省家計消費状況調査より2人以上世帯における年間園芸品・同用品消費額より作図

2. 生産の状況

次に供給サイドについて確認する。

図 2 は、鉢物の生産鉢数および作付面積の状況を示したものである。図表 1 で見た需要の減少傾向と同様、2000 年前半をピークに、その後減少に転じていることがわかる。ピーク時に比べると、生産鉢数で 68%、生産面積では 75%の水準にまで減少している。供給における減少要因は、前述のような需要減少と生産者の高齢化による廃業によるものである。

図 2 鉢物の出荷鉢数および作付面積の推移



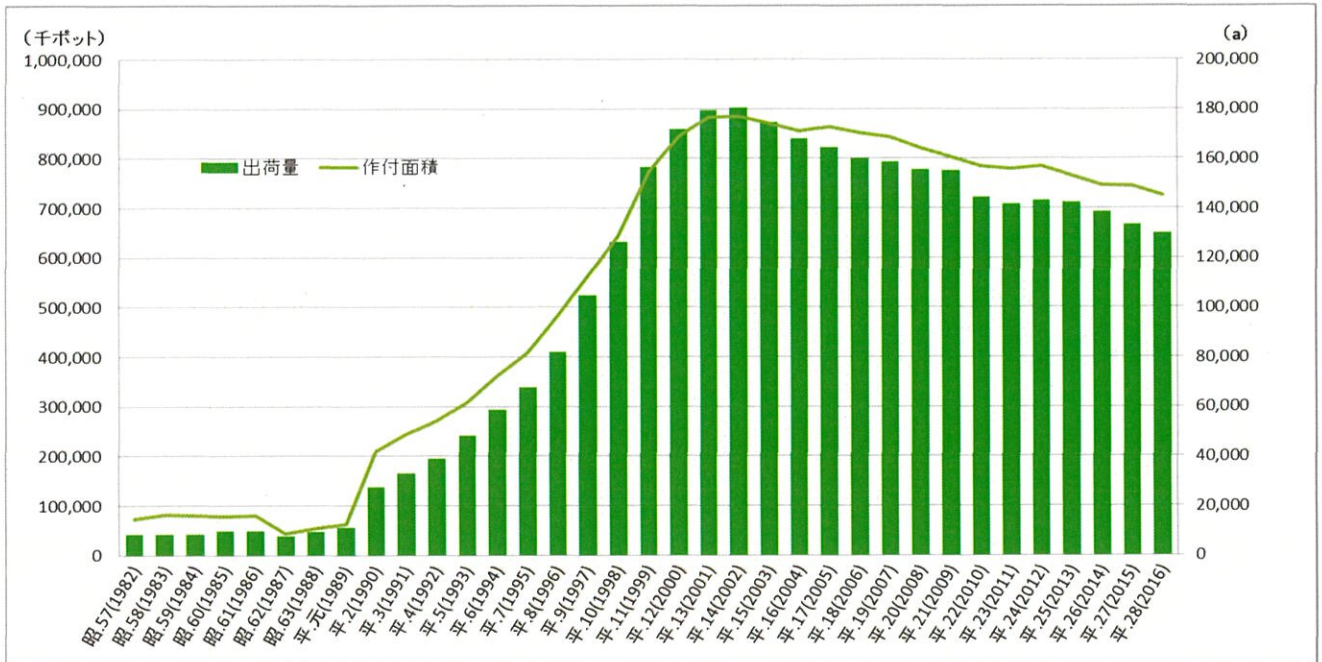
(注) 棒グラフは出荷鉢数を表し、左目盛に該当する (単位は 1,000 鉢)

折れ線グラフは作付面積を表し、右目盛が該当する (単位はアール)

(資料) 農水省花き生産出荷統計より出荷鉢数と作付面積引用し作図

図3は、苗物の生産鉢数および作付面積の状況を示したものである。図表1で見た需要の減少傾向と同様、2000年前半をピークに、その後減少に転じていることがわかる。ピーク時に比べると、生産ポット数で68%、生産面積では79%の水準にまで減少している。供給における減少要因は、前述のような需要減少と生産者の高齢化による廃業によるものである。

図3 苗物の出荷ポット数および作付面積の推移



(注) 棒グラフは出荷ポット数を表し、左目盛に該当する (単位は 1,000 ポット)
折れ線グラフは作付面積を表し、右目盛が該当する (単位はアール)

(資料) 農水省花き生産出荷統計より出荷鉢数と作付面積引用し作図

3. 花きのサプライチェーン

鉢物及び苗物（以下園芸品とする）のサプライチェーンは、図4に示す通りである。

主要なプレイヤーについて確認すると、先ず種苗会社は、新品種の育成及び種子・苗・球根等の生産・販売を行う者である。

次に生産者はいわゆる農家を意味するが、種苗会社から種子・苗・球根等を購入し、花卉の生産を行う者である。

卸売会社は、生産者あるいは生産者から花卉を集荷した農協（以下 JA）等の生産者団体から花卉を仕入れ、仲卸会社や小売業に販売する事業者である。

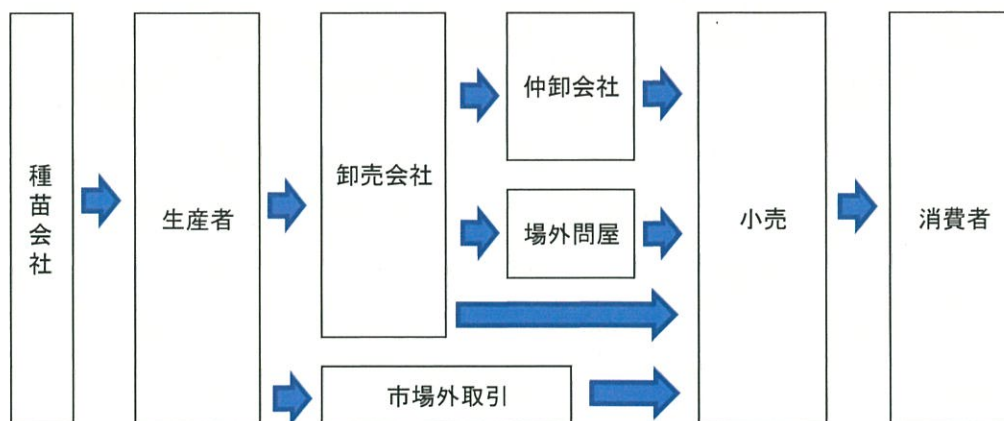
園芸品においては、個人生産者や農事法人からの直接の出荷が多い。また、切花と違い、輸入品はごく少量である。

仲卸会社は、卸売会社から花卉を購入し、小売業に販売する事業者である。この卸売会社と仲卸会社の機能について補足すると、前者は、①公正な取引、価格形成、②商品と情報の集散、③代金決済、④衛生管理等の機能を、後者は、①仕入れ代行、②小分け・分荷、③商品評価、④地方転送等の機能を担っている。

小売業は、卸売会社や仲卸会社から商品を生入れ、消費者に花卉を販売する事業者である。一般的な花屋、スーパーマーケット、ホームセンターなどが該当する。

近年、卸売会社や仲卸会社を経由しないサプライチェーンのシェアが、緩やかながら上昇している。とは言え、卸売会社や仲卸会社を経由する取引の比率は77%と依然として高い（平成27年、金額ベース、農水省卸売市場室調べ）。青果58%、水産物52%、食肉9%に比べると、その高さは際立っている。花きのサプライチェーンにおいては、卸売会社の存在が大いことがわかる。

図4 園芸品のサプライチェーン



4. 花きの種類

わが国における花きの産出額は、2017年（平成28年）において3,788億円であった。その内訳は図5に見るとおりである。

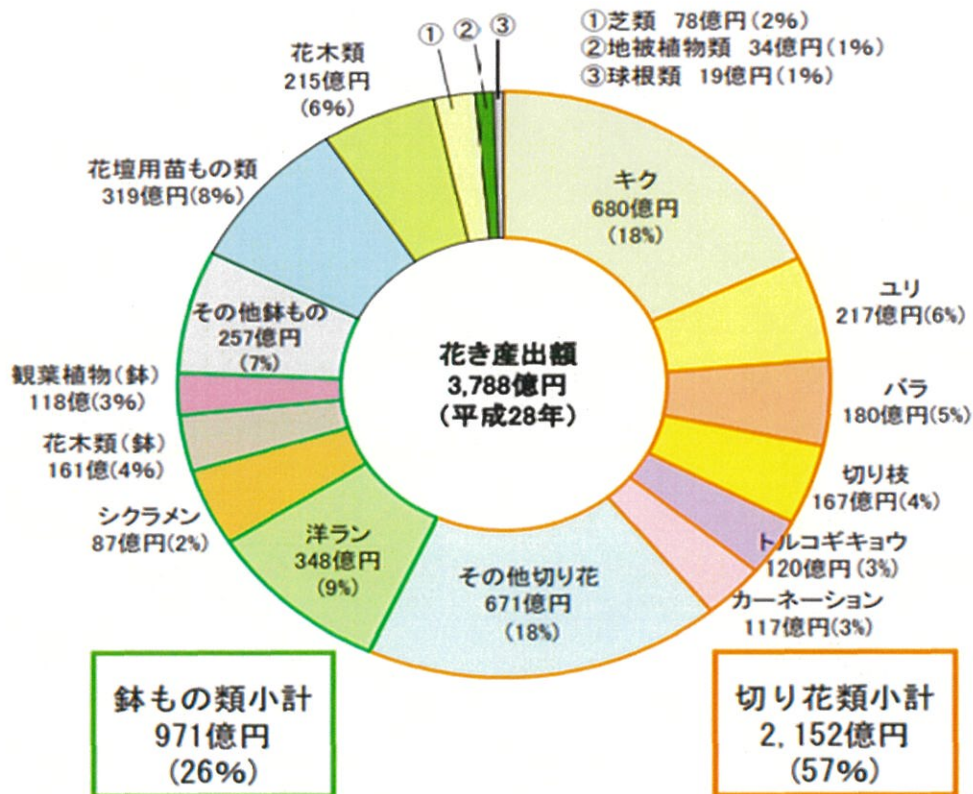
全体の57%を切り花、26%を鉢物、8%を花壇用苗もの類、6%を花木類が占めている。

鉢物の内訳をみると、最も多いのは洋ラン類で、全体の9%、シクラメンが2%、花木類が4%、観葉植物が3%、その他の鉢物が7%となっている。

一方、表1は平成28年花木等生産状況調査から抜粋した種類別の生産量（鉢、ポット）を示す資料である。数量ベースではその他の鉢物、花木類、観葉植物の順番で多い事がわかる。

本事業では物流を取り扱う事から、流通量の多い その他鉢物類、観葉植物又は花木類（アジサイやポインセチア）の流通について、及び苗物を対象とするのが妥当であると考えられる。

図5 花きの産出額の内訳（平成28年）



資料：農林水産省「生産農業所得統計」、「花木等生産状況調査」

表 1 平成 28 年花木等生産状況調査より 鉢ものの類の作付面積 (ha)、出荷数量 (千鉢)

区 分	作付 (収穫) 面積		出荷数量	
	H28	前年対比	H28	前年対比
合 計	27,465	97%	-	-
鉢ものの類	1,675	97%	226,500	99%
シクラメン	188	99%	17,600	100%
洋ラン類	195	98%	15,800	99%
観葉植物	304	95%	42,300	100%
花木類	391	94%	44,200	96%
その他	597	98%	106,600	99%
花壇用苗もの類 (花き苗類)	1,450	97%	649,300	97%
パンジー	275	96%	134,600	97%
その他	1,175	98%	514,700	98%

5. 園芸品の流通の現状

次に園芸品の流通の現状を示す。なお、5.園芸品の流通の現状及び、6.台車に関する現状については本事業にて調査を行った内容である。

表 2 園芸品の市場流通において発生する作業とその時間 (4 tトラックで換算した場合)

作業内容	項目	生産者 (分)	運送 (分)	共同集荷 (分)	運送 (分)	市場 (分)	運送 (分)	加工場 (分)	運送 (分)	店舗 (分)	計 (分)					
台車載せ替え作業	台車集荷の場合	載せ替え	10	載せ替え	20	載せ替え	30	載せ替え	30	載せ替え	20	載せ替え	20	商品並べ	40	210
	手積み集荷の場合	手積み⇒		手積み	60	台車		台車		台車		空台車回収		空台車回収		270
検取作業		積み替え後 伝票目視	15	積み込み 目視	20	目視	20	目視	20	ラベル貼り	30	目視	10	目視	10	205

*表について説明
本表は、園芸品(鉢物、苗物)の集荷から販売までの一般的なフローを調査しまとめたものです。
単位は分、一人あたりです。

生産者から出荷し、市場を経由して小売店に届くまで発生する作業をまとめた表が表 2 である。

作業項目としては、商品が載ったトレーを台車に載せる、載せ替えるという作業項目が主な内容である。4 tトラック一台あたりに換算して、この作業だけで通して 270 分から 210 分必要とする。270 分の場合は、手積みといって、生産者から市場へ出荷する際、トラック庫内に棚板を渡し、商品の入ったトレーを一つずつ積み作業が発生する。トラックへの積載率が台車流通よりも高いが、前述の通り作業時間が長く、また重量のあるトレーを扱うことから、従事者も減少している。手積みのような流通形態は減少傾向にある。